

【熊本国税局長賞】

「祖父からの学び」

日南市立吾田中学校

一年 戎浦 美幸理

今年の三月は私たち兄弟四人全員が卒業の年で、にぎやかだった。しかし、それに合わせるかのように、祖父が人生の卒業を迎えた。

祖父の体調が悪くなったのは二月。入院はせず祖母と叔父が自宅で祖父の看病をしたので、私も祖父に会いに行くことができた。そこで、訪問看護のケアマネージャー、看護師、介護士、在宅医など今まで縁のなかった方々の仕事を見ることになる。自分で動くことのできない祖父の身の回りのお世話を優しい声をかけながらしてくださっていた。家の中にも、今まで見ることもなかった介護用のベットやテーブル、トイレなどもあった。初めて知ることの多い一ヶ月だった。

在宅医療とは、通院することが難しい患者を対象に、医師や看護師などが自宅を訪ねて医療を施すことだ。病気になるれば、入院でも在宅でもかなりの医療費がかかる。高齢者が負担するのは大変だろう。医療費の自己負担が高額になった場合は、高額療養費という制度があり、これは一定の金額を超えた分が市の税金から払い戻される制度だそうだ。近年の新型コロナウイルスのワクチン接種や治療に税金が使われていることは知っていたが、色々な分野で税金が使われていることを今回の祖父の在宅医療で知り、税の仕組みを少し調べてみた。

税金とは、国や町が使うお金であり、私たちの暮らしを支えるために使われている。特に社会保障にかかるものだ。税金の代表的なのは消費税だが、所得税や住民税、介護保険料という税金等のたくさんの種類があった。しかも、一生懸命働いて得たお金が納められているのだ。

もし、税金がなかったらどうなるのだろうか。公共サービスを受けるのに、すべての費用を自分で負担しなければならず、困ることになる。例えば、救急車が有料になったり、医療費が全額負担になったりするかもしれない。みんなが豊かで安心して暮らしていくのに、税金はとても大切なものである。

祖父が亡くなった後、祖母がポツリと、

「じいちゃんは最後まで家で過ごさせて幸せやった。みんないい人でよかった。」

と言った。病気になるって多くのお金がかかったようだが、税金により安心した在宅医療・介護を受けることができたのは、祖父にとっても祖母にとっても本当に有り難いと思う。

年金・医療・介護などの社会保障を手厚くすれば税金や社会保険料の負担は増える。どんな社会にしていきたいか、どのくらいの社会保障を求めるかを私たち国民が考えていかなければならないと思う。

今から私ができること。

祖父の在宅医療を通して学んだことを生かして、身の回りのことに目を向けて、本当に必要なことに税金が使われるように節税に取り組んでいきたい。